



大賞出ず残念「ハブ君」に獨創性

「福祉と文化の出会い創造的な風土づくり」の理念をかかげて、沖繩市社会福祉協議会が本賞を設けてから第21回になる。入賞作は新聞紙上や「受賞作品集」

「ふくふく童話朗読会」などで多くの子どもたちに届けられる。選考は市内有識者による第1次審査で厳選され、入賞候補者として選ばれた7編を又吉栄喜、岸本マチ子、嶋津与志が最終審査を行って大賞・優秀賞・奨励賞を選ぶ。

今回の応募総数53編は前回より数編減少したが複数回の応募が44%、うち5回以上の応募者が12人という熱心な応募者によって年々全体のレベルは向上しつつある。ただし、今回は上位グループがだんご状にひしめいて、一歩抜きんでた作品が見あたらず大賞が出なかったのが惜しまれる。

「ねこ詣で」（向井裕子）は、怪談ばなし風の物語が達者な文章でたんねんに描かれていて興味をひかれるが、ストーリーの展開が不鮮明で主題が十分に伝わってこない。

「おばあちゃんのラブレター」（寺下計之）は、戦争で恋仲をひき裂かれた老婆が、未発送の恋文をタイムマシンのサバニに乗った老人の計らいで異次元の戦没兵士に届けに行くという空想物語。サバニのタイムマシンというイメージは新鮮だが、肝心の恋文の内容が開示されないの、愛する人を戦争に奪われた主人公の心情が十分には伝わってこない。

「命ぬ力チャーシー」（池宮城けい）は、終戦直後の収容所で肉親を失って悲嘆にくれる避難民たちを、三線を弾いて

励まし歩いた人物の話。実話だけに詳細な裏付けとリアルな背景描写が求められるが、規定枚数内ではテーマが大きすぎてムリがあった。

「宇宙怪獣ギドドンガス」（原国奈津紀）は児童文学界にもついに宇宙怪獣が現れたかと興味をひかれたが、マンガやゲームの怪獣ものを文字に写したような獨創性の乏しい空想物語に終わってしまった。

奨励賞「さつきは、ごめんね」（島尻勲子）は、弟が生まれて母親の独占権を奪われた3歳児の複雑に揺れる心理と行動を描いて生活感のある作品。メルヘンやファンタジーものが多いなか、日常生活の中での幼児の心理と行動をたんねんに描いた作品は貴重で共感するという高い評価と、平凡すぎて物足りないという評価に分かれた。

奨励賞「スーパードッグ ブルース」（伊礼健二）は、老犬と少年が夢の中でさまざまな冒険旅行を体験するという単純なストーリーだが、老犬に寄せる少年の情愛がしみじみと描かれていて、夢の中の出来事が現実と交錯する才力が印象的な余韻を残している。

優秀賞「やんぼるの森のハブ君」（佐藤允美）は、候補作のなかでは最も獨創性があり、平易な文章も説話体のストーリーとマッチして楽しく読ませる。人間にいい抜かれた善良なハブの腹の中にだんだん怨恨の毒がたまって毒蛇に変身していくプロセスも、怪談じみた迫力がある。欲をいえば、昔話風の沖繩カラーをもっと出してほしかった。